

## 短大特任教員教育研究業績書

平成 30年 5月 7日

氏名	ふりがな	所属	職位	性別
新居 佳子	あらい よしこ	保育学科 通信教育課程	教授・准教授・ <input checked="" type="checkbox"/> 講師・助教	男・ <input checked="" type="checkbox"/> 女

## 担当科目名

保育の心理学Ⅰ、保育の心理学Ⅱ

## 学歴

和暦(西暦)年 月	事項	学位
平成9(1997)年4月	神戸女学院大学 人間科学部 人間科学科 入学	
平成13(2001)年3月	神戸女学院大学 人間科学部 人間科学科 卒業	学士(人間科学)
平成13(2001)年4月	大阪大学大学院 人間科学研究科 博士前期課程 入学	
平成14(2003)年3月	大阪大学大学院 人間科学研究科 博士前期課程 修了	修士(人間科学)
平成15(2003)年4月	大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程 入学	
平成17(2005)年7月	大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程 退学	

## 教育歴・職歴

名称	期間	教育内容又は業務内容
神戸看護専門学校第二学科 非常勤講師	平成15年4月 ～平成18年9月	授業担当「心理学」「人間関係論」
神戸総合医療介護福祉専門 学校診療放射線科 非常 勤講師	平成16年4月 ～平成16年7月	授業担当「心理学」
近畿大学文芸学部文化学科 非常勤助手	平成16年9月 ～平成17年3月	授業補助「心理学実験B」
神戸総合医療介護福祉専門 学校看護科 非常勤講師	平成16年9月 ～平成17年2月	授業担当「心理学」
国立病院機構大阪医療セン ター附属看護学校 非常勤 講師	平成17年4月 ～平成17年9月	授業担当「心理学演習」
大阪大学大学教育実践セン ター 助手	平成17年8月 ～平成19年3月	大学における学生の思考力涵養に関する研究及び教育広報 活動
神戸看護専門学校第一学科 非常勤講師	平成17年10月 ～平成19年11月	授業担当「人間発達学」
大阪大学大学教育実践セン ター 助教	平成19年4月 ～平成20年7月	大学における学生の思考力涵養に関する研究及び教育広報 活動 授業担当「基礎心理学入門」「思考心理学」、授業分担「関 西は今」
近畿大学共通教養科目 非 常勤講師	平成19年10月 ～平成20年3月	授業担当「心理学」
大阪大学大学教育実践セン ター 招へい教員	平成20年8月 ～平成21年3月	授業担当「思考心理学」
神戸女学院大学人間科学部 心理・行動科学科 非常 勤講師	平成20年9月 ～平成28年3月	授業担当「認知心理学b」「心理行動科学実験実習 a」「発 達心理学入門」
神戸松蔭女子学院大学人間 科学部心理学科 非常勤 講師	平成20年9月 ～平成21年3月	授業担当「心理学基礎実習B」
大阪大学大学院人間科学研 究科附属比較行動実験施設 特任研究員	平成21年8月 ～平成22年3月	ヒトを含む霊長類の認知・行動に関する研究

甲南大学共通教育センター 非常勤講師	平成 22 年 4 月 ～平成 28 年 3 月	授業担当「認知科学」
大阪市立大学文学研究科都 市文化研究センター 研究 員	平成 23 年 4 月 ～平成 30 年 3 月	都市文化形成の特徴としての論理的思考：因果推論に関する研究
大阪市立大学大学教育研究 センター 研究員	平成 23 年 10 月 ～平成 24 年 3 月	大学教育に関する研究及び FD 活動
大阪市立大学文学部 非常 勤講師	平成 25 年 4 月 ～平成 28 年 3 月	授業担当「心理学への招待」「発達・学習論」
小田原短期大学	平成 30 年 4 月 ～現在	保育学科通信教育課程 講師 授業担当「保育の心理学Ⅰ」「保育の心理学Ⅱ」

所属学会等

名称	活動期間	活動内容（役職等の活動を含む）
日本心理学会	平成 13 年 4 月～現在	会員
関西心理学会	平成 19 年 4 月～現在	会員
日本認知科学会	平成 22 年 7 月～現在	会員

社会活動等

名称	活動期間	活動内容
研究紹介「自己卑下提示による『笑かし』」	平成 28 年 11 月	JR 大阪駅グランフロント大阪にて開催された「大阪市立大学文学部・大学院文学研究科オープンファカルティ 2016」にて、大阪市立大学文学研究科・研究科プロジェクト推進研究「笑いが人間社会に存在する理由」の活動として、広く一般に研究紹介を行なった。 自虐によって他者を笑わせるという行為に着目し文化差の可能性を論じた。

担当教科目に関する資格・免許等

名称	取得年月	取得機関
特記事項なし	年 月	

研究実績に関する事項

代表的な著書、論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 高等教育論入門—大学教育のこれから—	共著	平成 22 年 12 月	ミネルヴァ書房	文部科学省中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて答申」「我が国の高等教育の将来像 答申」「国境を越えて教育を提供する大学の質保証について 審議のまとめ」(p.254)を解説した。 早田幸政・諸星 裕・青野 透(編著)、前田早苗・堀井祐介・島本英樹・服部憲児・西山宜昭・中村征樹・古賀曉彦・高橋 真義・望月太郎・松河秀哉・斎藤貴浩・山田政寛・新居住子・松下戦具
思考と推論—理性・判断・意思決定の心理学	共著	平成 27 年 4 月	北大路書房	英国ウォルヴァーハンプトン大学元教授ケン・マンクテロウ氏の著書「Thinking and reasoning: An introduction to the psychology of reason, judgment, and decision

				making”の翻訳書。「第4章 推論と意味」を担当し、推論における内容の効果、因果推論、反事実的思考に関する研究について翻訳を行なった。 山祐嗣・服部雅史(監訳)、足立邦子・佐藤有理・服部郁子・ <u>新</u> <u>居佳子</u> ・中村紘子・眞嶋良全・高橋達二・中村國則
(学術論文) 国際間遠隔授業の効果に関する研究—海外志向性と同一性及びグローバル人材としての態度の観点から—	共著	平成26年3月	大阪大学高等教育研究第2号, 1-9.	海外との遠隔教育の効果について、海外志向性・自己同一性、グローバル人材の各尺度を用いて測定し、授業の効果を検証した。 松河秀哉・ <u>新居佳子</u> ・岩居弘樹・久保井亮一・紺野佳子
Postal addresses as an assay of cultural cognition.	共著	平成26年10月	<i>International Journal of Creativity and Problem Solving</i> , 24, 43-59.  日本教育工学会論文誌, 41(3), 233-244.	住所表記を材料として、認知の文化差を検討した。マレーシア・UAE・アメリカの研究者との共同研究で、マレーシアと日本での実験に従事した。 Nakamura, H., Yama, H., Brase, G. L. Zakaria, N., <u>Arai, Y.</u> , Zakaria, N., Mohd Yusof, S. A., & Kawaguchi, J.
トピックモデルを用いた授業評価アンケートの自由記述の分析	共著	平成29年12月		大学で行なわれている授業評価アンケートについて、テキストマイニングの手法を用いて自動的に分類を試み、その精度を検証するとともに応用可能性について検討した。下記（研究資金獲得）(d)の成果。 松河秀哉・大山牧子・根岸千悠・ <u>新居佳子</u> ・岩崎千晶・堀田博史
(その他) (学会発表) (a) The effects of contingency and self-involvement on causal reasoning.	単独	平成20年8月	6 <sup>th</sup> International Conference on Thinking	人間の因果推論において、推論者の行為により因果性が強く考えられることを実験データで示した。
(b) 因果推論における自我関与性の効果の再検討	共同	平成20年9月	日本心理学会第72回大会	因果推論は、自我関与がある時に因果性が強く考えられることを実験データで示した。 <u>新居佳子</u> ・赤井誠生
(c) 発達加速現象の研究・その22—健康習慣と性成熟—	共同	平成20年9月	日本心理学会第72回大会	下記（研究資金獲得）(a)による成果。平成17年実施の調査をもとに健康習慣の全国的傾向と年代変化、初潮との関連性が分析された。 日野林俊彦・赤井誠生・安田純・志澤康弘・ <u>新居佳子</u> ・山田一憲・南徹弘
(d) A method for examining the effect of ego-involvement on causal induction.	単独	平成22年8月	7 <sup>th</sup> International Conference on Cognitive Science	因果帰納における自我関与の効果調べの方法として考案した実験事態の妥当性を提示した。

(e) Beyond truth And falsity (2): Void value in causal inference and abduction.	共同	平成 24 年 9 月	日本心理学会 第 76 回大会	下記（研究資金獲得）(c)のメンバーで日本心理学会第 76回大会にてワークショップを2件行なったうちの1つ。 使用言語は英語。指定討論者を務め、なぜ人間は因果推論 を行なうのかを議論した。 Hattori, M., Hattori, I., Yama, H., Takahashi, T., Yokokawa, J., Over, D. E., Majima, Y. and <u>Arai, Y.</u>
(f) 因果帰納にお ける自我関与と効 用	共同	平成 25 年 11 月	関西心理学会 第 125 回大会	因果推論において自我関与が影響を及ぼすという現象に ついて、効用理論の適用を試みた。実験の結果、推論者に とって効用がー（マイナス）である時に行動する場合のみ 効用に敏感になり、効用を用いた説明は部分的に可能であ ることが議論された。 <u>新居佳子・山祐嗣</u>
(g) Semantic Classification of Text Messages Using the Concept of Community in Social Network Analysis.	共同	平成 27 年 3 月	13 <sup>th</sup> International Conference E-Society 2015	0-6 歳の子どもの子育てを行なっている保護者がどのよう な不安や悩みを持っているかを、大量のテキストデータから ネットワーク分析の手法を用いて抽出した。 Matsukawa, H., <u>Arai, Y.</u> , Iwasaki, C., Kinjo, Y., & Hotta, H.
(h) ネットワーク 分析とトピックモ デルによるメッセ ージ分類の比較	共同	平成 27 年 9 月	日本教育工学会 第 31 回全国 大会	0-6 歳の子どもの子育てを行なっている保護者がどのよう な不安や悩みを持っているかに関して、トピックモデルと ネットワーク分析の2種類の手法で分析し、それぞれの手 法による分析結果の違いを検討した。 松河秀哉・ <u>新居佳子</u> ・岩崎千晶・金城洋子・堀田博史
(i) What kind of anxiety do parents have during raising children?	共同	平成 28 年 7 月	Pacific Early Childhood Education Research Association, 17th Annual Conference	0-6 歳の子どもの子育てを行なっている保護者が不安や悩 みが年齢ごとにどのように異なるかをトピックモデルの 手法を用いて大量のテキストデータから自動的に抽出し、 分類・整理した。 Matsukawa, H., <u>Arai, Y.</u> , Iwasaki, C., & Hotta, H.
(j) A cultural difference on causal reasoning by a causal induction paradigm: Japanese data.	共同	平成 28 年 8 月	International Conference on Thinking 2016	現在進行中の因果推論の文化差に関する因果帰納パラダ イムを用いた検討について、日本人データを示した。それ により先行研究を支持しない可能性が示唆された。 <u>Arai, Y.</u> , & Yama, H.
(k) トピックモデルを 用いた統一基準によ る各年齢の子育て不 安の分類	共同	平成 29 年 9 月	日本教育工学会第 33 回全国大会	0-6 歳の子どもの子育てを行なっている保護者の不安や悩 みが年齢によってどのように異なるかについて、すべての 年齢の保護者の書き込みをまとめてトピックモデルで分 析することで、一定の基準で比較することができるよう になった。 松河秀哉・ <u>新居佳子</u> ・岩崎千晶・堀田博史

<p>(研究資金獲得)</p> <p>(a) 思春期発達変化に関する発達加速現象の心理学的研究</p> <p>(b) A method for examining the effect of ego-involvement on causal induction.</p> <p>(c) Beyond the truth: Degrees of confidence</p> <p>(d) ビッグデータを用いた子育て不安の分析と保護者の支援に関する研究</p> <p>(e) A cultural difference on causal reasoning by a causal induction paradigm: Japanese data.</p> <p>(f) 笑いが人間社会に存在する理由</p>	<p>研究分担者</p> <p>単独</p> <p>日本側参加者</p> <p>研究分担者</p> <p>単独</p> <p>共同研究者</p>	<p>平成19年4月～平成22年3月</p> <p>平成22年6月</p> <p>平成23年9月～平成25年3月</p> <p>平成26年4月～平成30年3月</p> <p>平成28年8月</p> <p>平成28年10月～平成29年3月</p>	<p>科学研究費補助金 基盤研究 (B)</p> <p>日本認知科学会 2010年度若手研究者海外発表助成</p> <p>二国間交流事業 フランス (ANR) との共同研究 &lt;CHORUS&gt;</p> <p>科学研究費補助金 基盤研究 (B)</p> <p>大阪市立大学大学院 文学研究科インターナショナルスクール 2016年度海外渡航支援</p> <p>大阪市立大学文学研究科「研究科プロジェクト推進研究」経費補助事業</p>	<p>大阪大学人間科学部で昭和36年より実施されている全国初潮調査による発達加速現象に関する研究。研究分担者を務めた。</p> <p>上記((学会発表)) (d)の国際学会での発表に対し、助成を受けた。</p> <p>命題は不確実なため真か偽かという二値で扱われるべきではないとする新アプローチを人間の推論研究に導入した研究。日本側参加者として、因果推論への新パラダイムの導入を検討し、フランスと日本の両国において多数の共同討議と公的公開を行なった。</p> <p>ベネッセコーポレーションが運営する電子掲示板「ウィメンズパーク」に投稿されたデータの分析によって0-6歳の子どもの子育ての悩みを同定しワークショップの開催等によって保護者の支援を行なった。心理学一般及び発達心理学の専門的知識を活用し研究分担者を務めた。</p> <p>上記((学会発表)) (j)の国際学会での発表に対し、助成を受けた。</p> <p>笑いやユーモアの存在理由について哲学と心理学の学際的アプローチにより多角的・体系的に考察したプロジェクト。共同研究者として広く社会発信を行なった。</p>
<p>その他 (表彰等)</p>				